

皆さんの中で、お読みになった方がいらっしゃいますか？

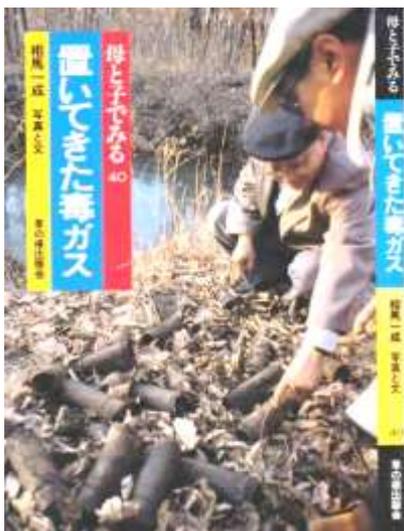
「満州国が残してきたもの・・・遺棄化学兵器処理続く」

昨年の夏、8月の読売新聞の見出しです。

「2018年8月の猛暑の中、中国吉林省のハルバ嶺の山あいで、ガスマスクと防護服をつけた日本人が旧日本軍の砲弾を手作業で掘り出している。日中両政府による旧日本軍の遺棄化学兵器の処理作業だ。」

ハルバ嶺には呼吸障害などを引き起こす有毒物質入り 30万～40万発の砲弾がさびたり、破損したりした危険な状態で埋められています。ハルバ嶺だけでなく、中国東北部に集中して埋められていて総数も分からないとの事です。今も厳冬期を除き、不発弾処理に習熟した元自衛隊員ら200人以上が常駐し活動しています。しかし、2022年処理完了目標の達成は難しい状況だという事です。

私は読んでびっくりしました。今も処理活動が続いているとは。処理は終わっているものと・・・友人達に聞いても知らない人がほとんどでした。最近の現地での様子がテレビ、新聞等で報道されていないのです。



時を同じくして、私は「置いてきた毒ガス」という本を入手しました。著者はカメラマンの相馬一成さん。驚いた事に私が市民大学1年次グループ時の企画委員だった方です。

相馬さんはある方との出会いから、旧日本軍が捨ててきた毒ガスが今でも中国に残っており、被害者が出ている事実を知りました。戦争末期、旧日本軍は敗走時、約200万発以上もの細菌兵器、

毒ガス砲弾を中国各地に遺棄しました。相馬さんはこの目でどうしても中国を見てみたいという思いが抑えられなくなったそうです。そして、中国各地を訪れ、被害者の声に心を寄せ取材をしてきました。相馬さんの写真は戦争の残虐さを映し出し、私達の胸に迫ります。相馬さんは、731部隊があった場所に立ち、死体を焼いた焼却炉やボイラー室の煙突にカメラを向け、何回もシャッターを押し続けたそうです。どうしようもない怒り、悲しみが押し寄せたのだと思います。

私はこの本に出会い、改めて旧日本軍が戦争中に中国で犯した残虐な行為の数々を思い出しました。また、戦後70年以上経っても中国の人々に被害を与え、苦しめ続けてきた事実を知りました。戦後生まれの私ですが、中国の人々に心から謝りたいとも思いました。

戦争体験者が少なくなった今、戦争を語る時、多くの場合が被害者側になってしまいます。私達は「加害者側」としての事実も語る必要があるのではないのでしょうか？戦争に行く事は人を殺しに行くという事。そこに住んでいる人達の生活を破壊するという事。そして、戦争が終わっても被害は終わらず、人々を苦しめ続けるという事。若い人達に加害側の日本が行ってきた事実も語り継いでいかなければならないと強く思いました。

戦争を語る事が出来る最後の世代とも言える私達の役割はとても大きいと思います。私は若い人達に「平和」を守る後継者になって欲しいです。

「戦争は嫌！平和が大事！」と思える若者を一人でも二人でも増やしていけたらと思います。私達だけで発信し、満足していても広がりません。シニアと若い人達が融合し、交流しながら平和について語れる場を持ちたいです。身近な所から行動を起こしていきませんか？所沢にある大学の学生達、生協のママさん、保育園、幼稚園、学童クラブの職員、保護者等、まだまだ沢山いると思います。若い世代と「戦争と平和を考える会」などを一緒に企画し、共に学んでいきたいです。